
ある男の高校生活

K助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある男の高校生活

【Zコード】

Z9993C

【作者名】

K助

【あらすじ】

天才な男子高校生が、女の子に恋をする。

なんでこの世はこんなに退屈なのか。

教室の窓から外の景色を眺めながら考える。

まわりでは知能の低い馬鹿どもが、授業を真剣に受けている。

ちなみに俺は俗に言う天才というものだが、テストではいつも平均点しか知らない。

出る杭は打たれるといつもので、過去に嫌な経験があるからだ。

授業の終わりを告げるチャイムがなり、昼休みになつた。

俺は鞄を持って、いつもの場所に向かう。俺に話しかけてくる奴なんていらない。俺は学校では空気のような存在だ。

いつも通り屋上で昼食をとる。屋上は立ち入り禁止なので他には誰も来ない。

というより、屋上の鍵を開けられるのはこの学校で、俺と教師だけだろう。

この屋上はうまい具合に他の校舎からは見えないようになつているので、なかなか気に入っている。

俺は、鞄から愛用しているタバコ

「セブンスター」を取り出し、火をつけろ。

「ふうー つまんねえ。」

一口目を肺一杯に吸い込んだとき、有り得ないことが起こった。誰かの話声がきこえたのだ。

「誰だろ? まあ鍵も掛かってるから来れるわけないけど。」

そう思い、特に気に止めることなくタバコをふかしていた。

するとドアのところで何か音がしているのに気付いた。

さつきの話声の主達が、何かを使って鍵を開けようとしているのだ。

「マジかよ。開く分けないし。てか考えりやわかんだろ。」

と思っていたのだが、ガチャリと音がした後、ドアが開きだした。

俺は咄嗟にタバコの火を消し、吸い殻を鞄の中に隠した。

「どう私のピッキングの腕もなかなかのものでしょ。」

先に屋上に入ってきたほうが後ろの人と言つ。

「んー…すごいけど…普通に犯罪だから。

つて、誰か居るよ！」

二人組は先客の俺に気付き、身構える。

俺は全く興味がない態度で、景色を見ていた。

「んー？あれ竹田くんじゃない？」

竹田、そう俺の名前だ。フルネームは竹田亮、別に普通の名前だろ？

「あー！ほんとだ。竹田くんだあ。何してんの？」

後から入ってきた方が俺に尋ねる。

「別に てかあんたら誰？」

俺は無表情で尋ねる。

「はあ？マジで言つてんの？同じクラスじやん！」

先に入つてきたピッキング女が強い口調で言つ。

「同じクラス？ 知らん。名前と顔なんていちいち覚えてない。そつちも同じクラスの奴か？」

俺は後から入つてきた女に尋ねた。

「私？違うよ。私は2組だから、隣りのクラスだね。ていうか、もう一学期なのにクラスの子の名前と顔覚えてないの？」

「全く覚えてない。必要ないからな。」

即答した。

ピッキング女が呆れたように

「私は山田加奈。でついでにこっちにいる子は、袴田由実。ちゃん
と覚えてよね。」

「必要ない。あんたらの名前なんか知らなくていいし。」

「ふつきりほつこいつ答えると、俺は屋上を後にした。

禁句（前書き）

ゆるーいペースで、進めております。
かも書きたいなあ。

短編と

禁句

昼からの授業を、いつも通り外の風景を見ながら受けた。
いや、授業なんてものはこの学校に入つてからまともに受けとはいのだが。

先程の屋上での出来事を思い返していた。

確かに、袴田とかいう名前の女が、屋上を去りつとした俺に話しかけてきた。

「竹田くんって、中学の時に全国模試で、満点取った人だよね？」
こいつは俺のタブーに触れてしまった。

俺は確かに頭脳は優秀だが、それを制御する能力には長けていない。
そして今は、俺が天才なんだということを知られないように生きて
いる。

この袴田の一言で頭に血がのぼった俺は、頭では冷静に判断してい
たが、怒りを制御できなかつた。

「あんた、何が言いたいんだ？」

袴田の首を片手で、軽く絞めながら問う。

袴田は恐怖の眼差しを俺に向ける。

「なあ、何が言いたいんだよ。黙つてちやわかんねえだろ？」

その時、ピッキング女 もとい、山田が俺の脇腹に蹴りをいれた。

「あんた何してんの？由実を殺す気？」

無防備な状態で、脇腹をクリーンヒットされた俺は、蹴られた箇所
を押さえながら、屋上から去つた。昼休みに起こつたことを、思い
出しながら景色を眺めていると、ノートの切れ端が飛んできた。
それに気付くと、その切れ端を手に取り、迷いなくゴミ箱に放り投
げる。

少しすると、またノートの切れ端が飛んできた。

不思議に思い、切れ端が飛んできた方を見ると、屋上で会つた、山

田がこいつを見ていた。

俺がそれに気付くと、山田は、その紙を見ひ、ヒーフジュースチャーをした。

その紙に田をやると、

「放課後に話しがある。」

と書かれていた。

しかし、字が汚い。小学生でも、もつとマシな字を書いてぞ。

山田の方を向き、俺は頷いた。

多少面倒だったが、昼のことは悪いと思っていたので、それだと謝つて終わらせよう、と考えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9993c/>

ある男の高校生活

2010年10月17日05時59分発行